

部省出仕時代の草稿では、日本語の身体部位名を集めた「体部名」、「丹氏内科新書目次」（「原本紀元千八百七十年米利堅第五版」）がある。「ミユラル氏生理日講紀聞」もこの時代の訳稿と推定される。明治9年から8年間つとめた埼玉県医学校時代の訳稿としては「仁墨爾（ニメル）氏内科書」（肺出血ノ条）と「欧米医学沿革史」がある。その他興味深い写本をあげれば、日蘭修好条約・貿易章程（1858）のオランダ語条文写本には朱で訳語が多く書き込まれており、「西伊勢蔵氏舌病容体書」に対する蘭医デ・マアイル氏の案文は原文と芳洲の訳文（1867年3月1日付け）が綴じられている。

最後に、洋学資料ではないが、芳洲旧蔵と考えられる写本「童観節記」はこの場をかりて是非紹介して置かねばならない。米沢藩の儒医片山元儒（1663-1723、号童観）の編纂した問答体の類書で、全35巻のうち坪井本は「卷之一下、時候類」「卷之二、人

品類、人体類」「卷之四、植物類」「卷之六上、文芸類上」「卷之六下、文芸類下」「卷之十三、経解類下之四」「卷之十五、経解類下之六」「卷之十九、技芸類」「卷之二十一、弁異端類」「卷之下、医学類、ト筮類」「卷外補遺中、雑類」の11冊からなる。これだけ伝わっている例は他にないようであり、貴重である。

坪井信道、芳洲、次郎、芳治という四代の医学者の伝記は、本稿でも参照した仲田一信『埼玉県医学校と日習堂蘭学塾』（1971）、青木一郎『坪井信道詩文及書簡集』（1979）、斎藤祥男『蘭医家坪井の系譜と芳治』に詳しいが、日習堂の蘭学自体は蘭学の本流に位置しながら、これまで余り研究の日があたらなかった。ここに一端を紹介した坪井本の新資料公開によって、日習堂蘭学の解明が進むことを願わずにはいられない。

理学部図書管理システムについて

理学部地球物理学教室技官

麻 生 和 彦

1. はじめに

最近の技術の進歩により、ひと昔前の大型計算機程度の処理能力を持った計算機が、今では低価格になり、誰もが手軽に利用できるようになりました。そのおかげで、いままで附属図書館などの大規模な施設でしかできなかった「貸出・返却・予約の管理」、「利用の統計処理」等の図書業務の電算化を、低価格で高速なワークステーションやパーソナルコンピュータを使って学部・教室の単位でも実現することができるようになってきました。

ワークステーションを使って図書管理システムを構築することにより、(1)電算化にともなう図書業務の簡素化、(2)各教室で行われる処理の分散化、(3)各学部・教室の特徴に合わせた図書管理システムの構築ができるようになります。

しかし現状は、これらのハードウェアにたいしてソフトウェア面では、附属図書館などで利用されている汎用機上で動作する図書管理システムはありますが、ワークステーション上で動作するシステムが用意されていません。

そこで、理学部では OMRON 社が自社向けに開発した図書管理システムをベースに理学部図書システム小委員会が中心となり大学の実情にあったシステムを開発することにしました。

2. 図書管理システムの概要

現在開発中の図書管理システムでできる図書業務の内容は(1)貸出・返却・予約処理、(2)目録検索処理、(3)発注・受け入れ・支払処理、(4)目録入力処理、(5)利用者・蔵書マスターの管理処理、(6)各種統計処理です。

上記の図書業務を実現するための図書管理システムのハードウェアの構成は、以下のとおりです。

(図参照)

ワークステーション	LUNA-II DT2465G
	メインメモリー 8 MB
	内蔵ディスク 250MB
	カセットストリーマ
周辺装置	バーコードリーダー
	2 GB 磁気ディスク
	光磁気ディスク装置
	レーザープリンタ
	DAU
端末装置	PC-9801 BX 2

これらのハードウェアを用意することによって、(1)バーコードリーダーを利用することによって、従来の貸出・返却処理が利用者 ID 番号と蔵書 ID 番号の読みとり操作をするだけでできます。また、利用者・蔵書の更新、削除などの管理業務もバーコードの読みこみによってできます。(2)膨大な量の蔵

書データの保存も、光磁気ディスクを利用することによってディスクの入れ替え作業だけで行え、磁気ディスクを増設するより安価に保存できます。また、図書管理システムがクラッシュしたときも光磁気ディスクにシステムをバックアップしておくことによりディスクを入れるだけで復旧することができます。

(3)図書室外からのシステムの利用者に対してネットワーク(KUINS、教室 LAN)からの利用ができるだけでなく、まだネットワークの設備が整っていない場所からも利用できるように DAU をとりつけ、電話回線からログインできます。

各教室レベルで利用しやすい環境を考えて図書管理システムのソフトウェアでは、(1)どのメーカーのワークステーションでも利用できるように、互換性が高い OS の UNIX と言語の C、INFORMIX で構築、(2)どのような端末からでも利用できるように、キャラクターベースでシステムを構築、(3)各教室の特徴に合わせたシステムを容易に変更・構築できるように、各処理ごとを部品として開発し、それら部品を組み合わせることによってシステムを構築、の 3 点を中心に開発を進めています。

3. システムの拡張

現在のシステムでは、図書業務の電算化を中心に開発されていますが、KUINS や教室内 LAN 等のネ

ットワーク環境を利用した、

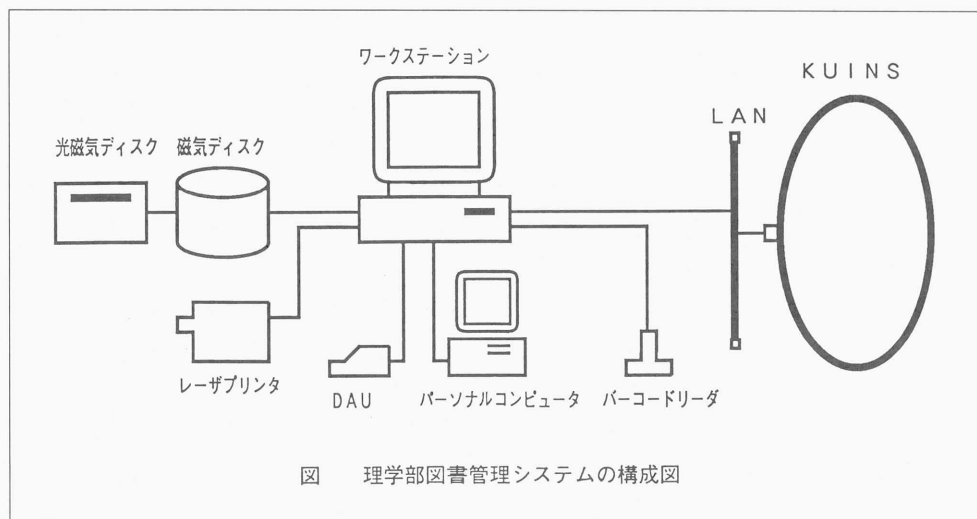
- 利用者と図書室の連絡用に電子メール利用サービスの提供
- 各図書室の情報(利用上の注意、新着図書の案内、休室のお知らせ等)を利用者が研究室の計算機から読むことができるような、ネットワークニュースのサービスの提供
- 提供する情報を文字だけでなく写真や音などでも提供できるように¹⁾WWW サービスの提供

以上のサービスを、これからの図書管理システムに組み込むようにしたいと考えています。

4. おわりに

図書管理システムを使うことによって従来の図書業務を簡略化することが可能となりますが、それを使いこなさなければ新しい仕事が増えるだけになってしまいますので、電算化を行うときはシステムの開発と同時にそれを実際利用する図書職員に対して十分に使いこなせるだけの研修や、利用者に対しての十分な広報が必要だと思ひます。

- ¹⁾マルチメディア対応のネットワークを利用した情報提供システム。WWW とは、World Wide Web (世界に広がった蜘蛛の巣)の略



鈴鹿本今昔物語集の修補に関わって (特別寄稿)

前附属図書館事務部長

吉 岡 千 里

新聞報道等によれば、平成 6 年 7 月 18 日、修補を終えた 9 巻の鈴鹿本今昔物語集の完成披露が鈴鹿氏を招いて附属図書館館長室で行われ、同 26 日には各

報道機関を招き記者発表も行われたとのことである。私も 7 月 27 日の朝刊各紙に掲載されたこの記事を読み、修補に関わった一人として感慨無量の思いであ